

アンチ・アンチエイジング(?!)

佐伯典彦

ラテン語の警句に「メメント・モリ」がありますが、「死を想え」と訳されている。現世に浮かれる人間への戒めですが、元来「今を楽しめ」という意味も含まれているらしい。つまり「飲んで、食べて、今を楽しめ。いずれ人は死ぬのだから。」ということだ。

現代は、「死」を想う前に、「老い」を想わなければならない。現代人の目は老いの現実から目を逸らしている。よりよい老後、いきいきシニアライフ、誰もが安心できる医療、心はいつまでも若々しく…。その一方で、新聞記事には、様々な老人がらみの事件が報じられている。介護殺人、老老介護、老人虐待、自殺、孤独死、餓死、路上死、無理心中…。

2006年の医療制度改革で高齢者の自己負担が引き上げられ、社会的入院を減らすため療養病床は減らされ、グループホームの新設が制限され、一方国民の医療費はうなぎのぼり。ジャーナリストは「弱者切り捨ては許せぬ」「高齢者に安心」「いのちの尊厳」等の批判を繰り返すばかりで、本当に状況を改善したいと思っているのか疑問を感じる、老人がらみの悲惨な事件を聞き、どうしようもない苦難を強いられている老人を目の前にすると、我々の社会は超高齢社会を支えるだけの実力があるのかと考えてしまう。

医療・福祉は資源。しかし無尽蔵にあるわけではない。老人・病気が増えすぎ、需要と供給のバランスは完全に崩れている。だが需要を抑えることには今一歩消極的で、世の中は需要を増やす方向に動いている。長生きする権利はある。だれもが安心して老いられる、だれもが十分な福祉を受けられる、そんな欲望の肯定に社会が振り回されている。社会の実力以上の負担を抱え込み、理想を求めすぎ。

ある特別養護老人ホームでは、職員が次々と退職している。心身共の激務に耐えられないから。職員の補充ができないと、利用者にしわ寄せがいく。ひどい話だが、安易に批判はできない。現場の職員の努力は限界に達している。職員を増やし、給料を上げ、十分な休みをとれば、良い介護はできる。しかし日本の全ての福祉施設にそれは無理というもの。すばらしい介護をしている施設もある。しかしそれは、優秀でモラルも高く、体力も精神力もすぐれた介護職員が集まっているところで、そんな所は基準にならない。

AさんとB子さんのケアカンファレンスでの報告。Aさんは認知症がひどくなり、窓から出ていこうとしたり、大声で怒鳴ったり、B子さんに暴力を振るったり。B子さんはうつ病で寝たきり。とても在宅生活が継続できない状況であるのに、2人も施設入所を頑として拒否。緊急避難的にAさんをショート入所したら、夜中に大暴れして強制退所。ケアマネ、看護師、介護職員が策を練ってもいい考えが思い浮かぶはずもない。「2人とも長く生きすぎたな」と不意に、不謹慎な発言をしてしまった。しかし、非難をする専門職はだれもいなかった。

このような困難事例に日々直面すると、答えは1つしかない。要するに需要を減らすこと。平均寿命と健康寿命の期間を短縮する以外ないということだ。

(さえきのりひこ、名張市役所福祉こども部地域包括支援センター主任介護支援専門員)